

日本に生きる キリスト者 の責任

～問われ続けた15年～

▪ 93EARC

▪ 97NC

▪ 03NC

▪ 08EARC…

はじめに

私たち全国協議委員会は、2003年全国集会直後の全国協議委員会春会議から『日本に生きるキリスト者の責任』とはどういう事なのだろうか、ということを経験して学びつつ、話し合ってきました。その中で、私たちが考える『日本に生きるキリスト者の責任』を言葉にして KGK に残していこうという思いが与えられたこともあり、そして一度ミッションステートメントという名で各地区に持っていきましたが、大きな恵みを短い文にして伝えるのには無理がありました。それならば、私たちが受けた恵みをそのまま直接受けてもらえれば良いということで、このブックレットの発行に至ったのです。

このブックレットに取り組み始めた当初は、北海道地区の藤田友也兄と関東地区の内山寛平兄がブックレット小委員として立てられていました。顔を合わせる事の出来ないメールや電話のみのやり取りで行うのは非常に難しく、小委員会の働きを関東地区全国協議委員会にゆだねることになりました。そして実際の執筆は、序章を安藤総主事、1章を青木義也兄、2章を渡辺三郎兄、3章と4章、あとがきを高木聡兄に担当してもらい、それを全国協議委員会の会議のなかで全国協議委員全員で読み、内容を検討してきました。ブックレット取り組みから発行に至るまで1年半以上の歳月がかりました。

このブックレットによって『日本に生きるキリスト者の責任』を、一人一人が考える良ききっかけになり、さらなる信仰の成長につながればと願っています。

2007年度全国協議委員会議長 東北地区 金野直言

目次

はじめに	i
序	iv
第1章 悔い改めることの責任	1
1.1 93EARC	1
1.2 悔い改めのスタート	4
1.3 わたしたちの悔い改め ～15年後の今～	5
第2章 証し人として生きることの現実 ～聖書の価値観に立って生きる～	7
2.1 97NC	7
2.2 日の丸・君が代とは	11
2.3 証し人とは ～現代にあふれる日の丸君が代問題～	14
第3章 継承していくことの現実 ～悔い改め続ける～	17
3.1 03NC	17
3.2 「日本」に生きること	19
3.3 信仰継承と自己吟味	21
第4章 実践することの現実 ～十字架に立ち返る～	25
4.1 信仰生活	25

4.2	十字架	26
4.3	全生活を通して...全協のメッセージ	27
	参考文献	29
	あとがき	31

序

今、私たちはどこにいますか。

日本の生活の中で周りを見回せば、温暖化の脅威、内政・外交の混乱、もはや私たちも驚かなくなったほどの各種殺人事件の数々。現代日本の課題はたくさんあります。でも、このような問題は人間が墮落したときからずっと続いてきたものです。そしていつの時代にも、神を信じる人々はその問題の中で悩み、神のみこころを行なうことを追求しつづけてきました。

私たちはみことばが「主に従うことこそが祝福を約束する」と語るのを「その通りだ」と思います。しかし、それを信じる生活、信じる生き方を貫いていくには難しさを感じているのではないのでしょうか。私たちが生きて、触れている日常生活の中に、信仰を貫く機会とともに妥協する誘惑が潜んでいるのに気付いているのではないのでしょうか。

このような「信仰を貫けない私」を、KGK 運動の中で、生き方を通して宣教する私たちへと変えられていきたいと願っています。

KGK は団体としても、生き方を通しての宣教を問われながら今日まで来ました。このブックレットは、1993 年の IFES 東アジア地区学生大会での出来事をひとつの目覚めとした、KGK の信仰告白についての取り組みを概観しています。アジアの兄弟姉妹を通して教えられたのは、日本の戦争責任以上に、教会の戦時中の信仰的妥協についてでした。そしてその精神を私たちが今も受け継いでいるという現実…。このことに向き合うために具体的に主が与えてくださったのは、国立青年の家からの日の丸掲揚・君が代唱和を行なう「朝の集い」の強要にどのように答えるかということでした。

かつて 1976 年、1979 年、1985 年の全国集会では、問題提起をする学生はいても、KGK としてはこの問題に正面から取り組むことなく「朝の集い」に参加していました。しかし、1997 年全国集会では、1993 年にアジアの兄弟姉妹に語った「この国が神に仕える国へと変えられること」の夢を行動に移すために、学生と主事が一緒になって、葛藤と緊張をもって戦ったのでした。全国集会そのものがキャンセルになる危険、経済的な大きな負担、準備委員や参加者・関係者のストレスのただ中で、キリスト者としての神の前での最善の選択は何なのかが問われたのです。全国集会当日から実に 1 ヶ月前の出来事でした。普通に正しいと思うことを実現することが、現代日本においてこんなにまで難しいとは思わなかったと、私たちは思いました。

このときの KGK の対応について、政治的に行き過ぎたところがあったのではないかというコメントは内外にありました。しかし、社会にも国家にも神中心の信仰を表明していくことは、私たちが真剣に信仰に生きるときに、これからいよいよ問われていくことだと思います。1997 年当時、関西地区の瀧浦滋先生は以下のコメントを KGK に寄せてくださいました。

「キリスト者の証しの戦いは、一見判断が難しいところで重要な戦いがなされる事がある。重要な原則の戦いが、あたかも信仰の中心から遠い政治的な事柄に見えたりする。当然、この世は知恵を尽くして事柄を曖昧にし、重要でないようにし、逃げようとする。その時、周囲に動かされず、信ずるところを変わらないで貫き続ける事で、多くの戦いは戦われる。あるときには不利であっても甘んじて覚悟して、静かにし変わらないことが大切である。また周囲にまどわされず、正当に発言するべきことを発言するべきときに発言することはキリスト者の義務である。それを怠ることはむしろわれわれのこの世を恐れる不信仰からくる怠慢である。…」

（「KGK97 全国集会信教の自由を守る『朝の集い』記録集」から）

当時、信仰を強く問われた祝福を、今の私たちも受け取りたいと思います。信仰の真剣さ、人目を恐れない信仰告白の姿勢を、私たちは日々お互いに励まして、取り戻しつつげたいと思います。私たちを日本での責任ある宣教に押し出してくれた東アジアの兄弟姉妹との交わりは、今日も続いています。

先輩たちが「日本が変えられるように祈ってほしい」と語ったことばを、私たちも引き継ぎ、この国に主の栄光が現われるために私たちをささげていきたいと思うのです。

このブックレットは、この問題について学生のことばでまとめなおしました。不十分ではありますが、このブックレットを入口として、ぜひ参考文献等から日本の教会の歴史を学んでください。これからをいかに生きるべきかを、みことばと交わりの中で考えて、実際にそれを生きる者とさせられていきましょう。

今回振り返った 15 年は、KGK の 60 年の歴史の上にあるものです。そしてこれからの 15 年、60 年がどのように建て上げられるかは、みなさんにかかっているのです。

総主事 安藤理恵子

悔い改めることの責任

93EARC^{*1}では、日本人参加者の代表が日本が戦争中アジアへ侵略行為をしたことについてアジアの兄姉に謝罪をしました。この謝罪はアジアの兄姉に喜んで受け入れられた半面、複雑に感じた兄姉もいました。この第一章では 93EARC での日本人参加者の謝罪を通して、悔い改めの本当の意味、悔い改めた後の私たちはどうすべきかを学んでいきたいと思います。

1.1 93EARC

93EARC は、1993 年 8 月 9 日から 16 日にかけて台湾の中原大学にて開かれ、テーマは“Shining Stars in a Dark World”、日本を含めた東アジア 9 カ国から併せて約 600 人の学生、卒業生が参加しました（内日本人 89 名）。

大会が始まり、アジアの兄姉との個人的な交わりが深まるにつれ、彼らがこれまでの歴史の中で日本の行為によって受けた傷、そして痛みが日本人参加者の目に明らかになり、何らかの応答をしたいと思うようになりました。大会中の International Night の前に国別ミーティングの中で何人かが、日本のアジアへの戦争中の侵略行為に関する日本人全員による謝罪をしてはど

^{*1} IFES 東アジア地区大会の略称。約 10 ヶ国の IFES 東アジア地区のキリスト者学生が主に参加し、宣教や現代に生きるキリスト者の使命などのテーマについて学び、分かち合う大会。93EARC とは 1993 年に開かれた EARC という意味。なお、IFES とは国際福音主義学生連盟の略称。学生への伝道団体の集まり。KGK も加盟している。

うかという提案をしました。この時、初めて戦争に目を向けさせられ、話し合いについていけず困惑した人、以前から関心を持ってこの大会に参加した人、話し合いの中で戦争責任を自分の問題として受け取った人など、参加者一人一人の関心や知識はまちまちでしたが、少ない時間の中で許される限りの議論と祈りの後に、謝罪をすることが決定されました。

国別ミーティングの後、謝罪文を作成するために数人の学生が討論を続け、この声明文を単なる謝罪に終わらせず、私たち日本人のこれからにつなげていくことを目的として、声明文をまとめました。

作成し、当日読み上げた声明文は以下の通りです。

日本 KGK 代表団スピーチ

今、私たちはご聖霊の臨在の中でこの時をもたせていただきたいと思います。私たちは、私たちの国、日本の、過去と現在における罪を告白したいのです。

今日、私たちの多くは皆さんの前に、日本人としての私たちの罪に対して、異なった気持ちを抱いて立っています。重荷として深く感じているものもいますが、一方で、過去に起こったことをむしろ単なる歴史的事実と捉えているものもいます。私たちのバラバラな感情をご理解いただきたく思います。

皆さん方もまた、さまざまな思いをお持ちのことと存じます。別の機会に日本人が謝罪をして、それなのに日本はなにも変わっていないのをご覧になって、失望されている方も大勢いらっしゃるでしょう。また、すでに私たちを赦してくださり、主にあって愛してくださっている方も大勢いらっしゃいます。たいへん嬉しく思います。私たちはこの時を、イエスと共にこの世の直中に入っていく、闇に輝く星としての新しい出発点とさせていただきたいのです。

私たちには夢があります！私たちは、私たちの主、イエス・キリストによって変えられたいのです。そうすぐには状況を変えることはできないかもしれませんが。

(続く)

どうか私たちを赦してください。心からお詫びをいたします。ごめんなさい。私たちを赦してください。

けれども今夜は、私たちの新しい始まりであり、第一歩です。私たちの夢は、私たちひとりひとりが主イエス・キリストの似姿に変えられていくこと、そして日本が神様の栄光を表すように変えられることです。私たちは、日本が、もはや力や経済的圧力ではなく、真理を、いのちの言葉をキリストの愛の言葉をもたらず国へと、神に仕え、アジアの兄弟姉妹に仕える国へと変えられることを祈っています。

どうか私たちと共に祈ってください。神様がアジアにおいて同じように、私たちを日本において輝かせてくださいますように。

声明文を読み終えると、すぐに会場の大勢の人が立ち上がったたり、拍手をしたり、舞台まで走りよって日本人参加者の手を握ったり抱きしめたりしてくれました。感謝なことに、日本の罪を主にあって赦し、日本のことを愛していると告白してくれる兄姉もいました。しかし、韓国の兄姉の中にはビジョンを理解し、励ましてくれた人がいた一方で多くの兄姉が座ったままなだれていました。彼らの中には、自分の肉親が日本人から傷つけられ、謝罪によって自分自身が負っている傷に直面させられ、深い悲しみや憤り、苦しみを覚えたり、また、日本人が、過去日本が犯した罪について十分に知らないまま謝罪だけを繰り返し、それにも関わらず日本がほとんど変わっていないという現実怒りを覚えたりした人も少なからずいました。

この出来事の影響はたいへん大きく、この後も続きます。日本を赦したと証しする人々と日本人参加者との間に和解を得たことの喜びは広がりましたが、韓国の参加者の間では、この声明をどのように受けとめるか、ということについて真剣に祈り、話し合いが行われました。こうした韓国の兄姉の応答が、日本人すべてに伝えられる前に大会は終わりましたが、日本人参加者の中にも韓国の兄姉の応答を間近に見て、自分自身が何らかの行動を起こしていく必要を痛切に感じた人や、また韓国の兄姉から直接具体的な助言を得

て、帰国後の指針を立てた人もいました。

1.2 悔い改めのスタート

93EARC での出来事に対して、「わたしたちとアジア*2」では以下のような評価をしています。

『現在、私たちが大会のことを振り返ってみたときに、日本人参加者に欠けていた、または認識が不十分だったと考えられることがいくつかあります。

- 謝罪が相手にとってどのような意味を持つのだろうか。謝罪の際に触れられる相手の傷の深さを理解しているのだろうか。
- 謝罪をすることで自分にどんな責任が生じるのだろうか。
- 謝罪をすることを、主はどのように受けとめられるのか。

参加者は、謝罪をすることで受け入れられようとする思いに支配されていた、という側面もあったように思います。』

次に、みことばを通して悔い改めの姿勢について学びたいと思います。

『今は喜んでいますが。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょうか。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは、悪を行なった人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たち

*2 93EARC を受けて、1995 年に KGK 全国協議委員会が作成した小冊子。日本人キリスト者とアジアの人々との関係についての学びが記されている。

に対するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。』(2コリント7:9~12)

この箇所では、罪を悲しみ、悔い改めることが、熱心を起こさせ、その熱心が神の御前に明らかにされることが本当の悔い改めであると書かれています。注意をして欲しいのは、悔い改めは罪を犯した加害者のためでもなく、被害者のためでもなく、神様のためであるということです。わたしたちが悔い改めをする時、どうしても相手の反応を考えてしまいがちですが、神様は悔い改めによる目に見える結果ではなく、神様に対する真摯な姿勢が大切であると言っています。悔い改めの本当の意味とは人の前ではなく、神の前に自分の姿勢を正すことなのです。

1.3 わたしたちの悔い改め ~ 15年後の今 ~

93EARC から約 15 年が経とうとしていますが、現在 93EARC からさらに学ぶことの出来ることを挙げたいと思います。それは悔い改めの後、私たちはどうあるべきかということです。

『また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。』(ヤコブ 1:22~25)

この箇所では、みことばを聞いたならば、そのみことばの教えることを行うように勧めています。過去の事実を知り、悲しみを覚え、悔い改めの思いを抱いたらそれをいつも心に留め、行動に移し続けることが大切だと勧めています。過去の事実を知りながらそれを行動に移すことが出来ず、いつの間

にか過去の出来事として、風化させてしまうことは今までの KGK の歴史の中でもあったことです。それを繰り返すことは簡単です。しかし、困難を伴うかもしれませんが、神様に対し、真に応答し、行動に移し続けることによって祝福を得ることが出来ます。そして、それは KGK 運動の更なる前進に繋がることだとも言えると思います。

全国協議委員会*³ は 1993 年全国協議委員会夏会議において、93EARC での声明文の内容は KGK の正式な態度表明であることを承認しました。私たちも KGK に所属する一員としてこの謝罪に対して責任を持たなければなりません。責任を持って、悔い改め続け、アジアの兄姉との関係の修復に取り組み続けなければなりません。このような問題にどれほど関わるかということはその人に与えられた召命によるでしょう。しかし、キリスト者として知り、考えなければなりません。

現在の日本の政府の様子を見ると、憲法の第九条の内容を改正し、日本をかつてのように戦争のできる国に作り変えようとしています。また、歴史教科書の内容を書き換え、日本の犯した罪を正当化する表現にしようとしています。首相は戦没者を弔い、敬い、戦争を美化する靖国神社に参拝しています。他にも日本をかつての帝国主義へと押し進めようとする動きがたくさんあります。日本は悲惨な過去を繰り返しつつあります。日本人として少しでも危機感を持たなければなりません。問題に対して、関心を持たず、危機感を持たないことは、それを容認することを意味すると思います。私たちは過去に犯した罪を知り、それを通して現在の状況を知り、悔い改め続け、緊張感を持って応答し続けていく必要があるのです。

(設問)

1. 93EARC の出来事から問われていることは何だと思いますか。
2. 真の悔い改めとは何ですか。

*³ 学生同士での全国的な交わりと活動のための協議機関。各地区の KGK の活動の情報交換や全国的な視野から考え、地区活動の調整を図るなどの機能がある。年二回全国の各地区から学生の代表が集まり、定例全国協議委員会を開いている。この年二回の会議を一般的に春会議、夏会議と呼ぶ。

第2章

証し人として生きることの現実 ～ 聖書の価値観に立って生きる

この第二章では、第一章の 93EARC への一つの応答の形として、KGK が 97NC ^{*1} において問われたこと、日の丸・君が代問題について見ていきたいと思います。私たち、日本に生きるクリスチャンにとって日の丸・君が代とはどのようなものなのでしょうか。

2.1 97NC

問題の始まりは NC 三ヶ月前に青年の家より「朝の集い（日の丸掲揚・君が代斉唱をする朝の集会）には参加してください。」と連絡があった事でした。

以下は 97NC 当時の全国協議委員会と NC 準備委員会が、NC 参加予定者に経過報告した文章です。^{*2}

「昨年の暮れになって、全国集会の会場として予定していた国立中央青年の家より連絡があり、当初の契約ではしなくても良いことになっていた朝の集いの「日の丸」掲揚・「君が代」唱和への参加を求められました。戦前、いつの間にか世の流れに押し出され、妥協してしまった日本の教会の歴史を知

^{*1} 1997 年開催の全国大会（NC）

^{*2} 以下太字部は、『KGK97 全国集会 信教の自由を守る「朝の集い」記録集』 1998 年キリスト者学生会主催会 より抜粋

り、これを繰り返すまいと決意した私たち KGK としては、この問題を見過ごすことはできず、1 月に入ってから直接交渉しに赴きました。...この交渉は平行線に終わり、最終的に青年の家が提示した条件は、朝の集いに代表者 4 名が KGK から出席することで妥協するというもので、KGK もそれを承認しました。

しかし 1 月末にもたれた全国主事会でこのことに疑問が投げかけられました。過去に国立の施設で行われた全国集会でこうした問題を黙認してきたことに比べれば進歩はあったとは言えるが、4 名出すことはどのような理由があろうとも結局は妥協に過ぎず、それはこの数年間、KGK が取り組み行っていたことと逆行し、それを自ら覆すものではないのか、といった意見で、さらに学びと協議を進めた結果、今回出席を認めたことは主事会の判断ミスであり、これから中央青年の家ではなく他の会場を探して全国集会を開くことを学生に提案してみよう、ということになりました。」

「主事会からの提案を受けて、学生の側では全国協議委員と全国集会準備委員のそれぞれが 2 月 4 日、東京で会議を開き、その場で「日の丸」・「君が代」の持つ問題点を学び整理しました。...その後の議論で...人数が減っても代表を出すならば KGK が「日の丸」・「君が代」を結果的に認めたことになること、93 年の IFES 東アジア地区大会や文書「私たちとアジア」で、日本の社会が変わるよう言葉に表すだけでなく、具体的に行動しようと私たちが表明してきたことを実践に移すこと、等を理由に、その決断の重さゆえに評決は容易ではなかったのですが、4 人の代表を送り出すことに賛成する人が誰もいなかったことから、...別の会場を探すことになりました。」

第二回目の青年の家との交渉が、NC 一ヶ月前に行われました。青年の家からの再度の妥協案「『朝の集い』」に出席すると言っておいて、当日欠席すれば良いではないか」という案が出されました。KGK としては、自分自身の信仰の問題として「嘘をつくことはできない」という理由からどうすれば良いのかと悩みつつ、その案は受け入れられないということで、会場をキャンセルすることに決めました。そして、他の施設を大急ぎで確保し、参加者には会場変更の旨を伝え、準備委員の間で、プログラムの練り直しが行われました。

しかし、その後さらに新しい展開がありました。NC 開催後に発行された

全国協議委員会の資料には以下のように説明されています。

「今回のいきさつについての意見を、文部省やマスコミに公表する旨の文書を青年の家に送付。直後、青年の家の担当者から連絡が入り、KGKの朝の集い不参加を認めると言ってくる。文書で不参加を受諾することに関しては、かなりしぶったが最終的に「朝の集いに不参加」を承認する文書がKGKに送付されてくる。その後、準備委員会・全国協議委員会であらゆる角度から再度、会場選定に関する話し合いを持ち、最終的に「国立中央青年の家」使用を決定する。」

準備委員は、NC開催までひと月を切っていましたが、会場を青年の家に戻すという決断をしました。(他施設のキャンセル料100万円)参加者にも再度変更の旨を伝えることになりました。

3月10日～14日：全国集会当日「朝の集い」不参加のまま、会場使用
現在もKGKは青年の家使用時、朝の集いは不参加である。

上記の青年の家とのやりとりは、当初朝の集いに不参加で了解だったものが、青年の家側からの事情で振り回されたもので、KGK側としては認められて当然であった、信教の自由を守るということ、つまり朝の集い(日の丸掲揚・君が代斉唱をする朝の集会)に参加しないということを守るためのものでした。この青年の家とのやりとりを通して、当時まだ、法制化がされていなかった(1999年に国旗国歌法成立)にも関わらず、日の丸・君が代を拒否する事、また、筋を通す事が如何に難しいかが、どれほど痛みを伴う事なのかが見てとれます。このやりとりをみて分かる通り、私たちキリスト者にとって信教の自由を守るために日の丸掲揚・君が代斉唱という事が問題とされています。なぜ、私たちは日の丸・君が代を問題とし、警戒していかなければならないのでしょうか。97NCを振り返って考えさせられた、また考えていかなければならない、次の3つの観点を見ていきたいと思います。

1. 日の丸・君が代と天皇制との関係

日の丸・君が代は一般に次のように考えられています。

日の丸：戦前には教育勅語などを根拠として天皇崇敬やいわゆる

軍国主義を浸透させる際に天皇の写真とともに教育の場で使用された物で、天皇崇敬の象徴。

君が代：天皇の治世がいつまでも続きますようにと天皇家の繁栄を祈る歌（政府見解において「君」は「日本国及び日本国民統合の象徴である天皇」）

私たちキリスト者にとって、何が問題なのでしょう。私たちは日の丸を掲揚し、君が代を斉唱することにより偶像礼拝をしていないかということが問われていると私は考えます。第2節でも触れますが、天皇が私たちの偶像になっていないか、ということが問題なのです。

2. 他のアジアの人々から見た日の丸・君が代

第二次世界大戦等では特にアジア各地での日本軍の統治・占領の象徴として日の丸・君が代が用いられました。そのため、これらの物に対するアジアの人々の目は厳しいものです。この、戦前を思い出させるような同じシンボルを使うことは戦争に対する悔い改めの欠如ではないのでしょうか。つまり、アジアの人々への愛のなさ、悔い改めのなさにつながってしまうと言えるでしょう。

3. 日の丸・君が代を強制されるということ

この日の丸・君が代は信教の自由で個人個人の裁量に任されたものではなく、法制化され、徐々に強制的なものになってきています。やってもいい、やらなくてもいいというものではなくなってきているということです。

『日本宣教と憲法』（第18回 JEA 信教の自由セミナー報告書^{*3}）に現職の教員によるこの事に関する証しが載っています。その報告書において、この強制されるということは、私たちが第一としなければならないのは、神への信仰であるにもかかわらず、信仰よりも国からの命令を第一とさせられてしまう、国の命令を守らなければ、『公共の福祉』に反するということで罰

^{*3} 『第18回 JEA 信教の自由セミナー報告書 日本宣教と憲法』 日本福音同盟社会委員会 2007年

せられてしまう危険がある、ということです。

2.2 日の丸・君が代とは

2.2.1 日の丸・君が代問題に対してキリスト者は如何にあるべきか

キリスト者であったとしてもこの問題に対して次のような態度もあるのではないかと考えられます。「どうでも良いよ。日の丸・君が代は私たちキリスト者が別にこだわる所ではない、政治に宗教が関わりすぎては危ないよ」という態度をとり、国との関わりと信仰は別物だと考える態度です。

しかし、日の丸・君が代問題を考える際に、1節のところでも考えたようにそれが自分自身の信仰とどのように関わっているのかということ、聖書から考えなければなりません。つまり、決してどうでも良くはないのです。あなたがこの問題と向き合うときに、主はどう見られるのか、主は何を喜ばれるのかということを考えていかなければいけないのです。

あなたにとって、この天皇崇拜は偶像礼拝になってしまっていないでしょうか。『これくらいは大丈夫』と考えていたイスラエル（偶像崇拜の例、士師記 2:11～15 偶像崇拜と戦った例、ダニエル書 3章）はどうなってしまったのでしょうか。旧約聖書を見てみると、イスラエルにおいて偶像崇拜が何度も行われ、そのたびごとに主の怒りが、主の悲しみがイスラエルの民に現されています。

また、他のキリスト者に対してつまずきを与えるものになっていないでしょうか。他のアジアの兄弟姉妹に痛みを与えるものになっていないでしょうか。

私たちキリスト者は、日の丸・君が代とどのように向き合わなければならないのでしょうか。この世で「常識」とされているのではなく、聖書という土台に立ってこの問題にしっかりと直面し、考えなければならないと思います。

2.2.2 この世の権威に従うとは

『奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。』(エペソ 6:5~7)

私たちはこの地上で、日本という国に生きています。この日本で生きる時、地上の主人 (ex. 政府・上司・権威ある者に対して) に従うということはどういうことなのでしょう。キリスト者のこの世に対する姿勢、神に従うことと地上の主人に従うことはどのようなことなのでしょう。聖書にはこの様を書いてあります。

主人に対して主に仕えるように仕える、主を恐れかしくみつづ真心から仕える。うわべだけの仕方ではなく、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕える、と。それはなんのためなのでしょう。何のために私たちは仕えるのでしょうか。それは神の栄光のために、主の福音が宣べ伝えられるため、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるため (ピリピ 2:11) ではないのでしょうか。私たちは、この日本という地において、主の栄光が現されるよう生きていくべきである、と主から命じられています。この日の丸君が代の問題でもそうですが、そのほかどのような歩みの中においても、どうすれば主の栄光が表されるのだろうか、どうすれば地の塩世の光として歩めるのだろうか、ということを考えながら歩んでいかなければならないと思います (全生活を通しての証)。キリスト者の歩みにおいて、キリストのものであることと、日本人であることを、今の生活の歩みとを別のものとして切り離すことは決してできないのです。

2.2.3 戦時中の日本のクリスチャンの態度から見えてくるもの

戦時中の日本において、キリスト者たちは真心から主に仕えるように日本において生きることができていたのでしょうか。歴史を見ていくと、できな

かったところもあるのではないかと思います。神社崇拝をしたことがありました。天皇を現人神として拝んだ歴史もありました。アジアの兄弟姉妹に対して、隣人となれなかった歴史もあります。記録によれば日の丸・君が代・皇居拝礼・天皇崇拝（神社崇拝）をアジアの人たちに教会の手によっても強制したとあるのです。

「1938年6月、日本基督教会の富田満氏^{*4}は、韓国でこのような演説をしています。（現代語訳は脚注にあり^{*5}）

『諸君の殉教的精神は立派だが何時日本政府は基督教を捨てて神道に改宗せよと迫ったか、その実を示して貰ひたい。国家は国家の祭祀を国民としての諸君に要求したに過ぎない。警官が個人の宗教思想を以って諸君に迫ったというが国家は斯のことを承認してはいない。基督教が禁圧せらるる時のみ我らは殉教すべきである。明治大帝が万代に及ぶ大御心を持って世界に類無き宗教の自由を賦与せられたものを浸りに遮るは冒瀆に値する。民間学者は勝手なことを言う。それを一々気に留めては諸君の方向を誤る。』（『福音新報』1938年）

キリストの福音にふさわしく歩むという点から離れてしまい、この世と調子を合わせてしまったのではないのでしょうか。しかも、恐ろしいことに、そのことに対して今、自分は偶像礼拝をしてしまっていると思っすらいなかったのではないのでしょうか。

このことは今の日本に生きる私たちにキリストの福音にふさわしく歩むた

^{*4} 富田満（1883.11.3-1961.1.15）日本基督教史大辞典より抜粋

初代日本基督教団総理。日本基督教会金城教会でアメリカ南長老教会宣教師マカルビン、R. E から受洗。明治学院神学部にて3年間在学後、新設の神戸神学校に転校、1期生として卒業する。日本基督教会時代、東京中会議長、大会議長、伝道局長などを務め、その間、日本キリスト教連盟総会議長、同連盟主催、神の国運動中央委員長などをまた、日本神学校、その後身、東京神学大学、明治学院、金城学院などの理事や理事長を務めた。

^{*5} あなた達の殉教的精神（キリストのために死ぬ事も厭わないという考え）は立派だが、いつ日本政府はキリスト教を捨てて神道に改宗しなさいと迫ったか、その実を示して貰ひたい。日本政府は国家の儀礼を国民としてのあなた達に要求しただけである（神社崇拝は宗教ではない）。あなた達は、警察が個人の宗教思想ゆえにあなた達に迫ったと言うが、日本政府はそのことを承認してはいない。キリスト教が弾圧された時にだけ、私達は殉教すべきである。明治天皇が世々に渡るお考えを持って、世界に他にない宗教の自由をあなた達に与えたのに、それを受け取らないのは冒瀆である。民間学者は勝手なこと（神社崇拝は宗教である）を言う。それを一つ一つ気にしてはあなた達は間違った方向に行ってしまうことになる。

めにどのように生きるべきなのかを示唆しています。

2.3 証し人とは ~現代にあふれる日の丸君が代問題~

様々な偶像崇拜

『ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。』(コロサイ 3:5) あなたは、偶像礼拝をしたことはありませんか。

偶像礼拝は『あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。』という言葉で思い浮かぶ、他の宗教の神を拝むといった、分かりやすいものだけではないと思います。現に日の丸・君が代も偶像崇拜とはなかなか思えないのではないのでしょうか。ただ、国に対して敬意を表しているだけだ、と。愛国心を持つことは必要なことである、と。確かに、日本の国に生きている中で、愛国心というものを持つことは必要であると思います。しかし、それはキリスト者としての愛国心であるべきであると思います。私たちは日本人である以前にキリスト者なのですから。

自分にとって、神様より優先したいこと、聖書はそれがあなたの偶像になっていると言っています。あなたには、神様よりも優先したいもの、大事にしたいものはありませんか。

神様より優先したくなるものはたくさんあると思います。お金であったり、恋愛であったり、他人からの評価、自分のプライド、さまざまな欲があります。神様より優先したくなるものの一つである他人からの評価というものを例に挙げて考えてみたいと思います。この世での地位や名誉や成績などと外面的で分かりやすいものもありますが、友人との関わりの中で、友人同士での一体感(仲間はずれではない異質なものではないということ)を大事にしてしまい、みんなと違うことをする事への恐れから、キリスト者であるということを証しすることができなかつたりすることはないのでしょうか。たとえ、キリスト者としての歩みとかけ離れていたとしても、これをするともみんなと同じになれるということをしてしまい、安心感を得ようとしてしまう

ことはないでしょうか。私たちは、本来求めるべき神様ではなく、この世の虚しいものにすがろうとしてしまっていないでしょうか。これが、具体化して現れてきたものの一つに君が代日の丸というものがあるといえます。あなたは『私は福音を恥とは思いません。』（ローマ 1:16）とパウロが証しているように福音を恥とせず、福音を第一として、神様の栄光のために歩めていますか。

コロサイ 3:2 で『あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい』と命じられています。しかし、神様よりも優先したいものがあるのならば、天にあるものを思うのではなく、地上のものを思っている状態なのです。コロサイのその後の箇所において（コロサイ 3:12～17）神に選ばれたもの、聖なる、愛されているものとして、この地上において、私たちはキリスト者としてどのように歩むべきかということを教えています。

それでは、私たちは日の丸君が代に対して、この日本においてキリスト者である、証人であり続けるということに対してどう向き合うべきなのでしょう。

97NC では聖書的価値観を持ってこの世（聖書の価値観とは違うが、この世で常識といわれていること）と戦いました。それは、普通に日本で生きようとするならば、無意味な行為、余計な苦勞に思えるかもしれません。キリスト者の兄弟姉妹から見ても、そこまで戦う必要はないんじゃないか、と思われる事だったかもしれません。しかし、私たちはこの日本において、キリスト者として歩み続けること、何が主から救われた者の歩みとしてふさわしいものなのか吟味し続けることを主から命じられています。この日本において、日々の生活の中で、主に対する確信を持って、この世の様々な偶像に対して忍耐を持って神とともに歩み続けることが求められているのです。何故なら、私たちは主によって、主を証する者として、この地上に立てられているのですから。

(設問)

1. 97NC の出来事についてあなたはどのように思いますか。
2. あなたには神様より優先したいものがありますか。あるとしたらどのようなものだと思いますか。
3. あなたはキリスト者としてどのように国に仕えていきたいと思えますか。

第3章

継承していくことの現実 ～悔い改め続ける～

第3章では2003年に行われた03NC^{*1}から、信仰継承と自己吟味の大切さについて学んでいきたいと思います。第2章の97NCから6年。97NC当時の学生がいなくなり、学生の間から徐々に97NCの記憶は薄れつつありました。

3.1 03NC

3.1.1 03NC

2003年3月3日～7日、兵庫県立嬉野台生涯教育センターにおいて2003年全国集会（NC）が開催されました。第12回目となる全国集会のテーマは「キリストのからだ」。約500人が参加し、渡辺信夫師（日本キリスト教会 東京告白教会牧師）、内田和彦師（聖書宣教会 聖書神学舎教師会議長）、ギデオン・ユン師（IFES 東アジア地区総主事）の3師によるメッセージのもと、キリストの望まれる教会の姿について深く学ばされる時となりました。

^{*1} 2003年開催の全国大会（National Conference）

3.1.2 「キリストのからだ」

03NC の主題講演では渡辺師が、教会の戦争責任について真正面から取り上げてくださいました。^{*2}NC のような大きな場で、このようなテーマを扱うのは KGK にとって初めての試みでした。一方、ホストとなった関西地区では、1年半前から準備委員会を立ち上げて NC に備えてきました。準備委員会内で教会について学ぶことを決めた際、「ただ単に聖書から教理的に教会を学ぶだけでは不十分なのでは」という意見があり、結果として教会の「負の遺産」も含めた多方面を取り上げることになりました。既に前章でも述べてきたように 97NC では「日の丸君が代」の問題が起こり、00NC ではその延長線上でプログラムが組まれました。03NC でも私達が「キリストのからだ」としてどのようにあるべきか、という点を意識してプログラムが組まれていました。

渡辺師の講演内容や、前章で述べた 93EARC、97NC における KGK の経験は、多くの下級生にとって初めて知る事実でした。また、当時の NC 準備委員会が発行した広報誌、「blanc」には、主事の視点から次のように語られています。

「過去に日本が朝鮮半島の教会に対して神社参拝を強要したことが渡辺師から語られた際、多くの日本人学生がショックを受けていました。しかし、韓国の学生たちは、自分たちにとって当たり前であることが日本の学生にほとんど知られていないことにショックを受けたようです。」

驚くばかりで悲しまない日本の学生と、それを見て悲しむ韓国の学生…。このように 03NC は、日本の学生が当時の出来事についていかに無知であるか、という事実を浮き彫りにした大会にもなりました。

^{*2} 渡辺信夫 「教会の戦争責任」 NC2003 広報誌 BlaNC Vol.4 （渡辺師のメッセージが掲載されている）

3.2 「日本」に生きること

3.2.1 日本に生きることへの気付き

03NCの直後に持たれた全国協議委員会の03春会議^{*3}では03NCでの応答として、「戦争責任について」というテーマで話し合いが持たれました。彼らの心の中には、ここで学んだ出来事を風化させまい、という焦りにも似た感情がありました。何とか次を担うKGKの学生たちにこのことを知っておいてほしいという思いは、KGKの過去、ひいては日本の教会の過去をあまりに知らない自分たちの謙虚な反省から出た思いでした。

しかし、その一方で彼らの中には「自分たちが身を持って経験した、この問題意識を次代に共有していくのはとても難しい」という別の危機感もありました。また、自分たちの経験したことを言葉にし、残していくのはとても労力のいる作業でした。さらにNCが終わってから間もないこの段階で、会議に参加した多くの全協は今回語られたメッセージについて十分に消化できないまま春会議を迎えており、「なぜ自分がこの問題に取り組まなければならないのかわからない」「初めて聞いた」「理屈は分かって自分のもになっていない」といった混乱の中で、03NCでの出来事にどう応答していくのか思い巡らしていきました。

ある沖縄の学生からは戦争責任ということに関して次のように述べています。

「沖縄の場合はその他の地域とは意識が全く違うと思う。沖縄は戦時中、下に見られていた。沖縄戦では捨て石のように使われたという意識をもっていた。小学生の時から『日本兵よりアメリカ兵の方が優しかった』という話を聞いていた。『日本兵にやられた』という意識を持っている。沖縄という立場は戦争責任を考えている立場なのか、それともむしろ韓国側なのかということが分からない。沖縄の歴史を知っていく必要があるということを渡辺先生の講演や先生との分かち合いの中で思わされた。」

^{*3} 全協では、毎年春と夏に1度、全国の全協を集めて会議を持っている。03春会議とは、2003年度の春の会議のこと。03NCの直後に持たれた。

「戦争責任」という言葉は、あいまいな言葉です。一人一人が心に思っている「戦争責任」が、それぞれ異なっているからです。03 全協は「戦争責任」を考える過程で、自分たちが言う「戦争責任」が、いわゆる国家や教会の罪責についてのものではなく、今生きている、日本人でありキリスト者である自分が、どのように生きていくべきかを捉え直すことであると考えました。

「日本におけるキリスト者の生き方」を考える、それが 03 春会議で与えられた全協へのチャレンジでした。そのためには、まず自分がこの問題について賛成か、反対かといった自己中心の視点から、この日本というシステムの中で痛んでいる人、悩んでいる人、苦しんでいる人に目を向けることが必要でした。そしてそれこそがこの問題に取り組む第一歩に見えました。それは前述のような沖縄、韓国の痛みをあまりにも理解していない自分たちに気付かされたからであり、ひいては 93EARC での他のアジアの人たちの痛みを理解したいと願わされたからでした。

3.2.2 03NC 後の全協

その後、全協は 03 夏会議において沖縄の学びを、続く 04 春会議では韓国の学びを行い、そこから示されたことを J's 別冊^{*4}にまとめ、発行するに至りました。漠然とした危機感と、手探りの歩みの中で、ぶつかり、示されていった課題が韓国、沖縄の人々の痛みでした。彼らの痛みを同じキリストのからだの一部として捉えることで、社会の痛みにも目を向ける新しい視点が与えられました。それは私たち全協の目が、社会の痛みに対して開かれていくという恵みにつながりました。

また、沖縄では 1999 年から、地区成立に向けて「O の会（沖縄地区設立準備委員会）」という名称で祈りが積み重ねられてきていました。03NC には沖縄から 10 名もの学生が参加し、その後全協のメンバーも含め、他の地区の学生が沖縄の課題に目が開かれるきっかけとなりました。それはやがて、沖縄地区成立（2004 年夏）のきっかけとなっていきました。

一方、「日本におけるキリスト者の生き方」「世の塩、地の光、架け橋となっ

^{*4} 2004 年度全国協議委員会 「J's 別冊 問い続けるために キリスト者として他者の
の苦しみ・痛みを考える」 沖縄編・韓国編

ていくこと」というスピリットは後輩全協に引き継がれ、06NC やミッションステートメント^{*5}へとつながっていきました。特に 06NC では「NotIce」というテーマの下、「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」(ローマ 12:15) という箇所から、隣人の痛み気付くということが取り扱われました。

3.3 信仰継承と自己吟味

さて、今まで 03NC と、その後の KGK が受けたチャレンジについて振り返ってきました。私たちはそこから一つの大切な事実を学ぶことができます。それは、私たちが「繰り返す」存在であるということです。

出エジプト記に出てくるイスラエルの民達の姿を振り返ってみると、彼らは「主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。」(出エジプト 14:31) とあるにも関わらず、自分に不都合なことがあると実に多くの不平を言っていたことが分かります。民達のその性質はその後のヨシュアやサムエルの時代になっても、さらにはイエスが来られてからも少しも変わることはない人間の性質でした。なぜ彼らは同じ過ちを何度も繰り返してしまうのでしょうか。その歴史を鑑みると、そこに「信仰継承」という問題があることに気付かされます。

先輩たちがどんなに優れた信仰者であっても、信仰継承が十分でないなら、主に背く世代は容易に興るのです。士師記には、「その同世代の者もみな、その先祖のもとに集められたが、彼らのあとに、主を知らず、また、主がイスラエルのためにされたわざも知らないほかの世代が起こった。」(士師 2:10) とあります。私たちの信仰は決して孤独の中で養われていくものではなく、お互いの関係性、先輩や後輩との連続性の中で養われていくものです。私たちはここに来るまでに、牧師先生はもちろんのこと多くの教会の先輩諸兄姉、KGK の先輩達の姿から信仰を学んできたはずで、そのように

^{*5} 全協が、今まで学んできたことを学生会のビジョンとして文言化しようとしたもの。草案ができたのち、各地区で審議されたがその後取り下げることとなった。(2006 年度全国協議委員会 「ミッションステートメントの審議取り下げのお願いとお詫び」)

考えると、私たちの信仰は孤立しているものではなく、むしろ歴史の流れの中で継承されてきたものです。

学生として KGK 運動に関われる時間は数年というごく限られた時間です。限られた時間の中で、先輩たちが積み上げてきたものを受け継ぐには努力が必要です。今回の 03NC 準備の段階でも、93EARC、97NC における KGK の経験は、ほとんどの下級生にとって初めての事実でした。しかし、NC という大会を準備することを通して、またその大会で受け取ったことを嘔み締めながら、私たちの先輩達は KGK が受けた過去のチャレンジを知っていきました。NC という大会は、開催すること自体が風化していく過去の事実スポットを当てる側面を持っています。NC を開催することによって、私たちは過去の NC、EARC での経験を知り、そこにあった先輩の姿勢から様々なことを学び、後輩へと受け継いでいけるのです。

KGK 運動は、紆余曲折を繰り返しながらも、主の憐れみの内に守られてきた活動です。入れ替わりの激しい私たちは、学内、ブロック、地区において先輩から学び、後輩へと継承していくことに心を砕かなくてはなりません。なぜならその姿勢は私たちが担う、次代の教会の生死を分ける問題だからです。私たちは、先輩達の話に謙虚に耳を傾け、また後輩達に自分達が大切にしてきたことをしっかりと伝えなければなりません。信仰継承が正しくなされないならば、私たちも容易にかつてのイスラエルの民達のようになり得るのです。

ヘブル書の 3 章の中で、著者は出エジプトの出来事を振り返り、その上で「「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」(ヘブル 3:13)と語っています。

私たちはこの地上にいる限り、サタンからの攻撃を受け続けます。日々たくさん誘惑が私たちの前に置かれています。そして、その誘惑に陥った時、私たちの心は「かたくなに」なるのだと著者は言っています。かたくなな心は悔い改めを避け、闇の世界を好みます。私たちの心の中に、少しでもかたくなな部分があれば、その心はもうかたくななのです。著者は、そうならないように「日々互いに励まし合って」と勧めています。

それはどういうことでしょうか。著者は、3 章で何度か、「兄弟たち」と

呼びかけています。そこに見られるのは、キリストのからだ、共同体としてお互いのことを励ましあう視点です。私たちは同じからだの部分として、自分を吟味し、さらにお互いのことをよく吟味するよう勧められています。それは、お互いのことを裁きあうのではなく、お互いの痛みや喜びに添い、共に主の前に立ち続けることを励ますことです。私たちは、キリストのからだとしてお互いを見るとき、励ましあえる仲間の存在、そして多くを学べる先輩の存在、自分を見つめる後輩達の存在に感謝することができるのではないのでしょうか。そしてそれはきっと、信仰継承へとつながっていくはずで

今、この瞬間、私たちは生活の全領域を主に明け渡しているのでしょうか。悔い改めとは、その先にある祝福を信仰によって勝ち取ることです。共に励まし合って信仰による勝利へと進んでいこうではありませんか。

(設問)

1. あなたは戦争責任について考えたことがありますか。あなたにとって戦争責任とはどういうことだと思いますか。
2. あなたにとって繰り返す罪とはどのようなものですか。なぜ繰り返してしまうのでしょうか。
3. 私たちは日本に生きるキリスト者の責任を果たすためにどのように励ましあうべきでしょうか。



実践することの現実 ～ 十字架に立ち返る～

4.1 信仰生活

私たちの先輩は、1～3章で述べたように NC や EARC を通して様々なチャレンジを受け、学内へと帰っていきました。私たちもまた、この振り返りの作業を通して多くのことを学んだはずですが、この章に至るまで多くを述べましたが、もっとも大切なのは私たちが「十字架に立ち返る」ということです。

悔い改め、聖書の価値観に立ち返り、立ち続け、その歩みを吟味し続けること。信仰生活とはこの繰り返しです。そしてこの繰り返しによって、人は練られ、キリストの似姿へと変えられていきます。私たちの先輩が歩んだこの15年は、それがいかに大切であるかを教えてくれたように思います。

悔い改め、それは 93EARC において私たちが学んだものであり、自分の欠け、弱さを主の前に認めることです。

聖書の価値観に立ち続ける、それは 93EARC で悔い改めた私たちが 97NC において問われた姿勢であり、地の塩、世の光として私たちが存在することです。

自己吟味、それは風化しつつあった 97NC の出来事を前に、03NC において私たちが向き合ったものであり、この世で証する私たちが、主の臨在の中で自分自身とお互いを問うことです。

信仰生活とはこの繰り返しです。なぜなら、自己吟味をした私たちは再び悔い改めへと導かれるからです。

4.2 十字架

では私たちは、何を悔い改め、どこに立ち返り、どう吟味すればよいのでしょうか。

かつて、私たちは失われた者でした。生きる意味を見失い、暗闇の支配の中をさまよっていました。しかし、キリストに出会い、その愛に触れ、生きる意味を与えられ、光の子となりました。

ローマ書には「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」(ローマ 12:1)とあります。

パウロは、「神のあわれみのゆえに」私たちに勧めています。自分の知識や経験、地位や思い込み、自己満足のために勧めるのではなく、ただ神があわれんでくださったので彼は勧めているのです。

私たちは、神のあわれみ、という事実とどれだけ真剣に向き合っているのでしょうか。神は、御自身のたったひとりの子をこの世界に遣わされました。その命と引き換えに私たちが生きるようになるためです。その血の贖いなしには私たちは生きることが出来なかったのです。まさにここに愛があるのです*1。私たちは、神に愛され、神はそのあわれみのゆえに、御子イエスを十字架につけて私たちを赦してくださったのです。

私たちにあって十字架とはなんのでしょうか。十字架はただの合言葉ではありません。「やっぱり十字架だよね。」と私たちが口にするとき、私たちはどれだけの実感をもそこに込めているのでしょうか。イエスもまた、その重みを忘れさせないために、私たちに聖餐式を持ち続けることをお命じになりました*2。逆に言えば、それほどまでに私たちは忘れやすい存在なのです。

パウロはさらに、私たちのからだを「供え物」として主にささげるよう勧めています。十字架の重みを感じるからこそ、供え物として自分自身をささげなさい、と言っているのです。供え物に主権はありません。しもべに権利はありません。福音書の中で、イエスも「自分の十字架を負ってわたしにつ

*1 ヨハネ 4:7-10 を参照

*2 コリント 11:23-26 を参照

いて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」(マタイ 10:38)と
言っています。キリストのために全てを捨てる、とは自分自身を捨て去る
ことです。それほどまでの愛と恵みを、私たちは十字架の内に見出している
でしょうか。私たちはここに立ち返ることができるでしょうか。

4.3 全生活を通して...全協のメッセージ

パウロはさらに、「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだ
であり、ひとりひとり互いに器官なのです。」(ローマ 12:5)と続けています。

私たちは、主にある兄弟姉妹、地上に遣わされた者です。国が違って
も、敵対しているように見えても、過去に何があっても、私たちは十字架を受け
入れたときから既に、「キリストにあって一つのからだ」なのです。

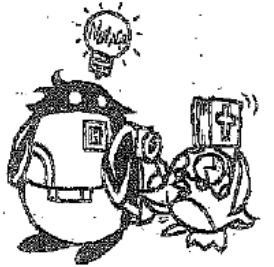
共に主を見上げる時、私たちは私たちが等しく主から愛され、代価を払っ
て買い取られ、召された存在であることに気がきます。私たち全協は、「日
本に遣わされたキリスト者」として「天国と地上の懸け橋になる」ことを祈
らされてきました。それは、この世にあって十字架を見上げ、暗闇の世界の
支配者と戦い、一致を保って福音を述べ伝えることでした。さらには、その
懸け橋の源である教会を死守し、広げ、祈りによってその一致を保っていく
ことでした。

私たちは今、宣教の最前線に立っています。私たちが、遣わされた場所で
その友人を精一杯愛そうとする時、神の愛が示され、教会が広がるのでは
ないでしょうか。最前線にいる私たちは常に戦いの中にあります。しかし、私
たちの背後で兄弟姉妹によるとりなしの祈りがささげられ、何よりもイエ
スキリストの十字架がそこにあることを知る時、私たちのいる場所は、決し
て孤立無援の場所ではなく「広げられた」神の国の一端へと変えられていき
ます。

それこそが、KGKの言う「全生活を通しての証し」ではないでしょうか。
それは、キリストの十字架による限りなく深い愛を知った者だけに許され
る、自由で、喜びに満ちた歩みです。

(設問)

- 1.あなたが十字架に立ち返るのはどのような時ですか。あなたにとって十字架とは何ですか？
- 2.キリストにある兄弟姉妹として私たちは他のアジアの人々とどのように交わりを持っていくべきでしょうか。
- 3.あなたにとって宣教の最前線はどこですか。あなたはそこでどのように証しを立てていきますか。



参考文献

各章の出来事について、さらに詳しくお知りになりたい方は下記の資料をご覧ください。

全般

- 『学生の伝道 2000』 キリスト者学生会 2000年
- 『KGK40周年記念誌「主が建てるのでなければ」』 キリスト者学生会 1987年
- 『KGK50周年記念誌「汝の若き日に」』 キリスト者学生会 1997年

1章

- 『わたしたちとアジア』キリスト者学生会 1995年

2章

- 『KGK97全国集会 信教の自由を守る「朝の集い」記録集』キリスト者学生会主事会 1998年
- 『97NCから見たもの、その後につなげるもの～歴史を担う学生の責任と福音～』キリスト者学生会 2003年
- 『第18回 JEA 信教の自由セミナー報告書 日本宣教と憲法』 日本福音同盟社会委員会 2007年
- 雁屋哲著 漫画 シュガー佐藤『マンガ 日本人と天皇』 株式会社イソップ社 2000年

3章

- 『J's 別冊 問い続けるために キリスト者として他者の苦しみ・痛みを考える [沖縄編]』 全国協議委員会 2003年
- 『J's 別冊 問い続けるために キリスト者として他者の苦しみ・痛みを考える [韓国編]』 全国協議委員会 2004年

- 『ミッションステートメントの審議取り下げのお願いとお詫び』 全国協議委員会 2006 年

あとがき

私の心の中にあるもの

07の春会議*1、前回の05EARCについて分かち合っている時に一人の姉妹がこんな体験を分かち合ってくれた。

「私は英語が苦手だから、同じグループのメンバーが英語を上手にしゃべれる中、私だけしゃべれないというのがすごく恐怖でした。でも、他のメンバーが忍耐を持って私がしゃべろうとするのをじっと待っていてくれたんです。単語から意味を読み取ろうとしてくれていた姿勢がすごくうれしかったし、励ましになりました。韓国のグループリーダーに『ここは裁くところじゃないから間違ってもいいんだよ』と言われて、愛を感じ、恐怖感が消えました。」

私はその話を聞き、グループリーダーの愛の僕としての仕える姿にいたく感動し、また、こうして励まされて大胆に証をする姉妹を前にして、神様の御計画の素晴らしさと、そのスケールの大きさに改めて感動した。

一方で私は、自分の心の暗闇から出る、愛

とは全く正反対の感情に気付いている。それは、恐れ、憎しみ、プライド、欲望、不安、劣等感、顕示欲...そういった類のものだ。93EARCからの15年の歴史を丁寧に紐解いてみると、私の心の中にあるこれらの思いがいかにも周りを、また自分自身を傷つけているかを知るに至る。93EARCにおいて私たちの先輩が戦争責任についての謝罪をした際、彼らは、「日本人はただ謝るばかりで何も変わらない。」と言われた。そうなのだろう。肉親を日本兵によって奪われた、韓国や他のアジアの国々の兄姉は今なお心を痛めている。その深い傷を目の前にした時、私はあまりにも無力だ。

私はEARCを恐れている。傷ついた他のアジアの国々の兄姉を目の前にし、言葉を交わし、触れ合い、お互いの経験を分かち合うことを恐れている。なぜなら私は、漠然とはあるが自分自身をアジアの中で加害者だと思っており、「被害者」である彼らと対峙することは、自分の惨めな姿と、無知をさらけ出すことに他ならないからである。「そのことだけには触れないでくれ、よくわからないから。」そう思っている。

なぜ私が「あの戦争」についてよく知らないまま育ったのかについてはここでは触れない。その原因はもしかしたら戦後の国家の教育方針であったかもしれないし、戦

*1 2007年度春の全協会議のこと

後の教会が、彼ら自身の恐れやプライドによって、私たち次代を担うものを知ること拒ませたのかもしれない。しかしいずれにせよ私は「よく知らない」のだ。そのことに変わりはない。

知らないがゆえに私は恐れている。知らないことに劣等感を感じている。申し訳なさを感じている。何とかその場を取り繕って、友情を壊すまいとしている。それが繰り返される謝罪へとつながっている。

赦されるということ

私が恐れていることがもう一つある。それは赦されることへの恐れだ。私自身が05EARCに参加したときに耳にした言葉、「私はもうあなたたちのことを赦しているよ。」という言葉だ。「過去に日本が、また日本の教会がどんなことをしていたとしても、またあなたたちがどんなに無知であっても、主あって私はあなたを愛しています。」という彼らの声だ。彼らはまるで放蕩息子話に出てくるあの父のように私たちを迎え、祝い、愛してくれる。そこには完全な赦しがある。

私はそれを受け取ることを恐れている。「もう赦しているよ」という言葉にほっとする一方でどこか疑いを抱いている。本当に赦されているのか、私なら赦せるだろうか、裏切られたらどうしよう、ほんとは憎しみでいっぱいなのではなからうか...そんな疑念が次々と湧き上がってくる。それは不信であり、目の前に差し出された救いの御手をつかむことができずにいる自分の姿である。

本当のところ私は心の奥深くで、何かをしなければ赦されないのではないかと、思っている。歴史をもっと深く知ること、それらをもとに自己吟味をすること、彼らの声を受け止めること、彼らの痛みを理解すること、どれだけ深い苦痛と、忍耐を味わっているかを知ること、それに共感すること、その上で謝罪をすること。これらのステップなしには赦されないのではないかと、思っている。それくらいしないと赦されないと思っている。それは「もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にして下さい。」と言った弟息子の姿に良く似ている。

私はもう一度「私はもうあなたたちのことを赦しているよ。」と言われたときのことを思い返す。私はあの日「ありがとう。」と言った。そして「私たち日本人がひどいことをしてごめんなさい。」、そのような趣旨のことを言ったように思う。私はあの時、自分の知識を示すことで相手の理解を得ようとした。私はこれだけ知っています、つらかったでしょう、苦しかったでしょう、同情します、共感します、ごめんなさいね。実際には私はほとんど何も知らなかった。私の心の中にあったのは「なにか見返りがなければ、理解の姿勢が示されなければ彼らは赦してくれないのではないか。」という恐れであった。それは神である父の無条件の愛とは対極に位置するもので、私は自分が今までどれだけ、見返りを求めるこの世の愛に飼い慣らされてきたかを知った。

「彼らの痛みを理解し、共感しさえすれば、彼らは赦してくれるのではないか。」この理解は自分がいかに神の前に失われた者

であるかを示すとともに、父の無条件の愛を受け取ることに恐れと困難を抱かせる。

父の愛

私はこのブックレットの作成を通して、KGKがこの15年に受けてきたチャレンジを振り返った。その振り返りで明らかになるのは、どこまでも未熟で、弱く、罪深い私の姿である。私は「私たちは主に仕えます」と教会で言いながら、いとも簡単に他の権威に仕え、恐れ、沈黙する。私は主の前に完全に赦されているにもかかわらず、自分を取り繕うために容易に神の顔を避け、園の木の間に隠れようとする。それは旧約聖書の時代から少しも変わることはない人間の姿であり、神が変わらず招き続けている民たちの姿でもある。

私は、自分自身を赦すことに大きな困難を感じている。無条件で赦された存在であるにもかかわらず、弟息子のように自分で足枷(かせ)をつけて父の御許(みもと)に帰ろうとする。私のここがダメだ、こうならなきゃ、こんなだから証にならないんだ、勇気が足りない、信仰が足りない、愛が足りない、私は知らなさ過ぎる、私なんか赦されるはずがない。キリスト者として誠実であればあるうとするほど己の足りなさばかりに目が行く。学校においても、教会においても、KGKでも、バイト先でも、家族の場でも、EARCにおいてですらそのような考えが私を襲う。これこそが劣等感、申し訳なさを故に繰り返される謝罪の温床であり、神の赦しを受け取ることを難しくする最大のサタンの働きである。それは、「何

もできないお前の存在は無意味だ。」と巧みに嘯きかける。

さらに私はそのような劣等感から人を妬むことを覚える。そして人と比較することをはじめ、見下すことをはじめめる。あの人よりはわかっている、あの人のようにはなりたくない。それは兄息子としての私の性質である。彼もまた、自分自身の本当の価値を認めることに困難を覚えていた。

父の姿にもう一度目を留めたい。「父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。」(ルカ 15:20)、「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」(同 15:31) 父は、弟に対しても、兄に対しても同じ深い愛を持って接している。なぜなら、彼らは二人とも父の愛する息子達だからである。性格の違い、気性の違い、考え方の違い、経験の違い、全ての違いを超えて父は息子達をただ愛している。

私たちはこの父の姿にこそ目を留めるべきではあるまいか。父は、完全には理解しあえない私たちの不完全さをはるかに超えて、私たちを愛している。私たちは主の栄光を現すために、代価を払って買い取られた。^{*2}それも、イエスキリストの死、という代価によってである。そこまでして、神は私たちを愛し、御自身の御計画のために私たち一人一人を尊く用いようとしている。その事実をもう一度嘯み締めたい。放蕩息子の話に描かれているのは、私たちがお互いや自分自身を赦せずに苦悶する姿を

^{*2} コリント 6:20 を参照

どこまでも包み込む大きな父の愛である。
そしてその愛は、御子イエスを私のために
十字架に架ける神の愛であり、同時に、私
のために十字架に架かられた、イエスキリ
ストの愛である。

その愛に、私は既に満たされている。そ
の事実をもっと知りたいと思う。

日本に生きるキリスト者の責任

～問われ続けた 15 年～

2007 年 11 月 5 日 初版発行 100 円

編集・発行 キリスト者学生会全国協議委員会

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル



沖縄いこ子